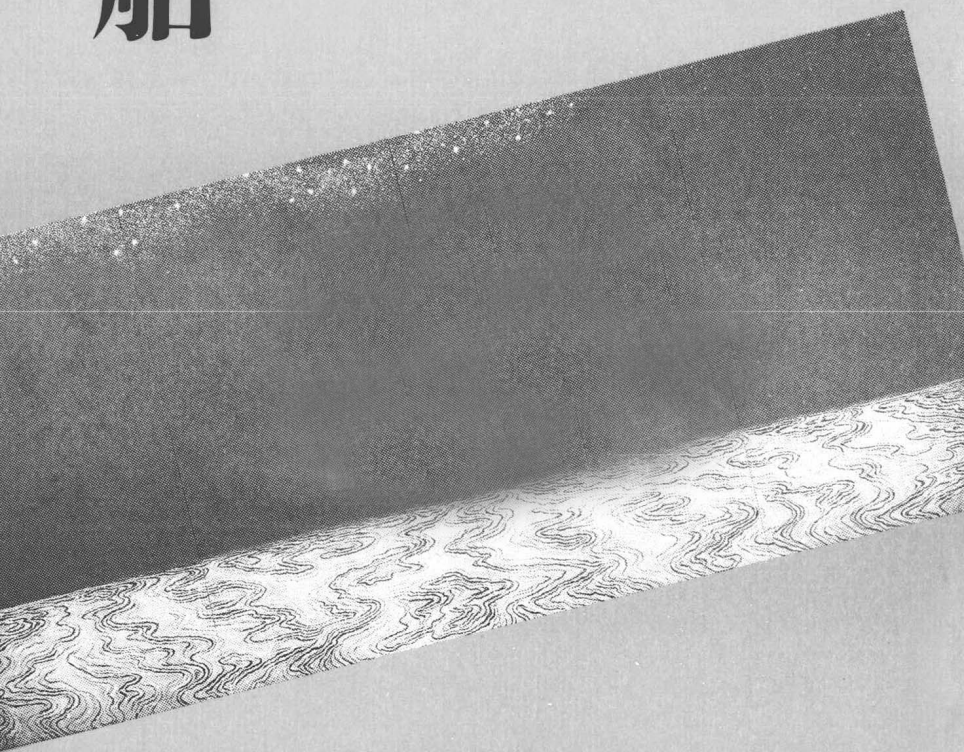


泥船

加堂秀三



船



どろぶね
泥船（書下ろし長編小説）

著者／加堂秀三

装画／守屋多々志「愛縛清浄」（屏風絵）

装丁／安彦勝博

＊

初版第1刷／昭和62年3月25日

発行者／増田義和

発行所／株式会社実業之日本社

東京都中央区銀座1-3-9／振替東京1-326

郵便番号104 電話 03(562)2051〔編集〕 (535)4441〔販売〕

＊

印刷所／大日本印刷株式会社

製本所／共文堂

＊

© SHUZO KADOH, Printed in Japan 1987

落丁本，乱丁本は小社でお取りかえいたします

ISBN 4-408-53080-8

泥
船

1

大森の駅のホームで偶然会って、光明と美樹江とは一緒に蒲田まで食事に行った。粉雪が降っていて、日が暮れかけていたが^{あえ}辺りがぼうっと明るかった。明るいののはしかしホームの海側、——横須賀線や東海道本線の電車がこの崖下の小さい駅を無視して雪のなかを走る側だけで、ホームは濡れていて暗い。気温が低くて寒いそのホームでばったりと行き合った。両方が体で誘う感じになって「止^よしたほうがいいのに」と思いながら電車に乗ってしまった。美樹江が脇田の女なのを知っていて手を出そうとしているのだから光明は心が高ぶった。脇田は、光明が勤める回路部品や高周波機器の会社で以前営業の仕事をしていた男だが、現在は会社をやめて、内幸町にある或るビルディングの地下のアーケードで紳士物の輸入雑貨を扱う店を経営していた。

セルツティのネクタイやバクサーのセーターが、そこに飾ってあった。

結婚後、結婚相手の一家がその商売をしていたので、脇田も商いの道へ入って行った。

それは経験のある営業の仕事と無関係なことではなかった。脇田が見回らなければならぬ店は、新宿にも横浜にもあった。光明は、美樹江と向き合ってガラスの濡れたドアのところに立っていると脇田が気になった。脇田が光明の心のなかで怖い男になって行く。

光明は去年内幸町の脇田の店まで行ってネクタイを買ったことがある。

体ががっしりとしていて顔の小さい脇田は、光明が女店員にネクタイを当てがわれて照れているのをみて、にこにこしていた。年は四十二、三。光明よりも十四、五は年が上だった。小さい顔に、癪癪かしゃく、剽軽ひょうきんさ、金銭関係でも単なる動作でも機をのがすことなく、はしっこく動く性質、そういったものがいっしょくたになって宿っていた。

「益永さん、飲めるの」

光明は美樹江に話しかけた。ドアのガラスは、車内の温気のために曇っていた。暗がり
を灯がながれた。

大森は、海のみえる駅ではなく、海は駅から東へI自動車やH製作所の間を京浜急行の大森海岸まで歩いてはまだみえないくらい遠いのだが、今日は雪が視界を塞いでいた。なんとなく海が見えそうな気がする。しかしそれもホームに立っている間だけのことで、電

車に乗ってしまうと海はどうでもよくなった。

「ええ。飲みますよ、弱いけど」

「じゃあ飲もうか。寒くて仕方がない」

美樹江と普通に向きあっているだけでは物足りなくて、光明は腕をドアのよこのボードへ突いて体を少し傾けた。光明自身がネクタイやポロシャツを買うとき以外にも、金型の仲間が脇田の店へ出向く場合にはついて行つた。美樹江が目当てでそのアーケードへ行つたのではないが、しかし光明は、仲間が美樹江の噂をすると、「あんなの善いな」と思ひはした。

四人も五人も金型工が店のなかへ入って行くと、美樹江は上気した顔をして、応対をする本採用の女店員から離れたところに立っていた。美樹江の体は、何人もの男が固まつて立つ、そのことから生じる光線を受けて、多分美樹江自身は知らない明るさになった。男の体から出る光はショーケースの間にいる美樹江の体のとんでもないところまで届いた。光明は、店を出てからも美樹江が忘れられないことがあつた。

そういったことが、これまでの美樹江との関係のすべてだった。それなら、美樹江が光明に誘われるまま食事に行くことに同意したからといって、いきなり厚かましいことはしないほうがいい。光明自身、美樹江の頬と肩とに近く腕を突いて胸へ胸を寄せて話すのは

行きすぎだと思った。しかし体がさきに動いた。光明は体が美樹江を欲しがっていることを隠さなかった。

美樹江は、光明が内心気が咎めるほど無遠慮に出て言い寄っても、取り上^とせた^の気持ちを目に見せただけで、光明を避けようとはしなかった。

電車は、雪を警戒する走り方をした。

「今日は休みでしたか」

欲望、「これはいけるー」といった手応え……、光明は、あっちへ動きこっちへ動く思いのために、ことばの調子を一定にすることができなかった。

「ええ」

そう答えたが、実際には、美樹江はこのところずっと脇田の店へ出てはいなかった。

「益永さん、大森？」

「そうです」

「ということは、いまからどっかへ行こうとしてたんじゃないんですか。いいんですか、俺なんかとつきあってて」

「……………」

美樹江は黙っていた。こんなことしないほうがいいのに、と思った。しかしどうにもな

らない。体の大きい光明に通せん坊をする感じで前へ立たれると、抵抗ができなかった。

蒲田の改札を出て、二人は幅のある階段をおりて行った。

町の灯が、雪のない夜よりも強く光っていた。

美樹江は少しくつむいて歩いた。

美樹江は女子大を出て、一年ほど丸の内にある海運会社で働いたあと、どういう理由でかそこをやめて、脇田の店を手伝うようになった。年は二十五歳。脇田の店へは就職の情報誌を見て入った。短期間のアルバイトのつもりだったのだが、しかし脇田が美樹江を放さなくなったのだと光明は聞いている。

話は、脇田の営業部時代の同僚からも聞いたし脇田にじかに聞いたこともある。

脇田の女は美樹江ひとりではなかった。それに脇田は、妻、子供、妻の両親兄妹といったふうに、家族が多い。

「脇田はあれ持てるんだな。奥さん、おっとりした美人だしね、もう一人の女も、水際立ってるね。あんなのが脇田の言うなりになるんかな。その点、内幸町のアーケードにいるあの子は平凡だな」

「あれですか」

「でも若いからね、新鮮なんだろう」

「そうですよ。上等ですよ」

脇田と割合に親しく行き来をしている営業部の日比野に、光明は、去年の夏だったと思うが数寄屋橋のビヤガーデンで、力をこめて話した。

瓜実顔の美樹江は少し腺病質そうなところがあるが、色が白くて頬がふっくらとしていた。中背で、店で見ると単純なデザインのスカートの包まれた腰が柔らかに張っていた。それはやはり男を知っている体だった。

光明は、日比野とビヤガーデンで話したとき、目の肥えたひとつていうか、物事を公平にみるひとは違うもんだな、この先輩は益永美樹江を若いから新鮮かも知れんが平凡だというのか、といった驚きの気持を表現した。心の底から驚いたのだが、光明は、そういうふうに言って、女に対する自分の慢性的な飢えや眼力のなさを誇示するのが愉しくなくなかった。

ビヤガーデンへは、日比野と光明のほかに、会社の野球部員が六、七人いっしょに出かけた。やがて元部員の脇田もやってきた。なんということもなく集まったのだが、脇田は、女のことと日比野に冷やかされて、酔いがまわった赤い目をして笑っていた。

「整理しようと思っているんだ」

「引き受け手は何人でもいるよ」

「いゝね」

南国の植物や提灯が蒸し暑い風に吹かれるそのビヤガーデンで、脇田が、金型、営業、組み立て、設計と、会社でのポジションがみなちがう野球部員をながめた。ビーチパラソルを立てたステンドレスのテーブルに夕明かりが差していた。

いま雪の道を美樹江と歩きながら、光明は、脇田の目が、小さくてくりくりとしていて、いかにも利かん気らしいやんちゃ坊主ふうの活気にあふれていたことを思い出した。しかし美樹江が滑りかけて光明の腕に掴まったりすると、光明としてはもう引っ込みがつかない。灯を踏んで歩くひとが、雪に当惑しいしい雪を面白がったり懐かしがったりしていた。光明と美樹江も、両方で掴まりあって、滑りそうになつては大声を出して笑った。美樹江の若い体重が思いがけなく光明の腕に掛かることがあった。体重は、光明が感じたままをいうと、女の体そのものだった。

「益永さん、今日は帰れないよ」

行き当たりばったりに入つた居酒屋で食事をしてから、光明は自分が美樹江をどうしようとしているかをそれとなく明かした。

美樹江は特別な感想を言わなかった。アパートは山王にあるのだそうだが、そのアパートで普段どういふふうに暮らしているのか。脇田がアパートへ来ることがあるのだろうか

か。美樹江の生活の中身は、食事の間、主に光明が美樹江に聞かれて金型や工業高校のことを話す側にまわっていたので、光明には分からない。分からないといえば、美樹江が光明に、

「ともかく、出ようか」

と言われて素直に立ちあがった理由も分からなかった。気まぐれなのか。脇田との間がそううまく行っていないのか。或いは、美樹江なりに二十八歳の金型工に性的な興味を持つて一晩つきあってみる気になったのだろうか。

二人でそとへ出ると、蒲田の町はすっかり白くなって灯の入った置き看板が丸っこくなっていた。

「三保さんは、寮？」

「寮」

「大井町？」

「大船」

会社の寮は、大井町にもあるが、工場へ徒歩で通うことができる大船の寮のほうが大きかった。

「じゃあ、今日どうして大森で会ったのかしら」

「大森に、仕事の仲間がいるんだけだね……」

部屋の隅に半間の庭がある旅館で、光明は、美樹江が「お茶淹れましょうか」と言ったので、仕方がない、仕事仲間が女に振りまわされている話を簡単にした。

岸というその後輩は、いっしょに暮らしている女がじっとしていないために、最近仕事
が手につかなくなっていた。

「だから何人かでようす見に行っただけど」

連れ立って岸を訪ねて行った同僚は、岸の女がほかの男のところにいると聞いて、岸が
尻込みするのを引き立て、タクシーで雪のなかを上野毛へ出かけた。

「俺だけ抜けたのは、運だったと思う」

上野毛へつきあっていれば美樹江と会うことができなかった。

「運が良かったんだ。運が向いてきたんかな」

光明は、坐るのが苦手だったし女と旅館へ入ってお茶なんか飲んでいられるほど普段セ
ックス面で満ち足りた生活をしてはいなかったが、美樹江がもしも吹き出してでもくれた
ら………と思っておどけた。金で体の始末をつけに行った先でも冗談をいって女を笑わせ
た。

美樹江は、こらえきれなくて笑い出すといったほどではなかったけれど、光明が、

「こうなるときはこうなるんだな。雪が降ったのも、益永さんがその雪に誘い出されたのも、偶然じゃないんじゃないかな。——あれ、俺が呼んだんですよ」

と言うと、含み笑いをして、気持の和んでいくのが分かる顔になった。男に馴れているのではなく性質が善いのだ。光明は勝手にそう決めた。そうはいっても、美樹江は、脇田が近づいて行ったときその脇田のペースに巻きこまれたのだから、光明が考えるほどお嬢さんかどうかわからない。お嬢さんなので脇田の網にかかったのか。光明は、脇田が美樹江に言い寄ったことも、面白半分に投網を投つといった、そういうことではなかったのではないかと心の片隅で思ったが、なにかの理由で海運会社をやめた美樹江が脇田のもとへ行ったときに、雇用主という立場をはじめとして、脇田の語学が美樹江以上であることや、営業マン時代の彼が何度となくカナダ、西ドイツ、アメリカといったところへ出張したことまで、ともかく脇田の立場が有利だったことは事実なので、美樹江を捕えてしまう脇田の手順がたいい分かった。

営業部時代の脇田が接待用に使ったナイトクラブのなかには、目先の変わったショーを見せる店がある、という話だった。

或るバーでは、外国人がその店のウェイターを外へ連れ出すことができた。

「そういうところへ行ってみる？」

「そうですね」

脇田が言うと美樹江は断りきれなかった。

そんな場面を実際に目撃したような気がするのが、光明は不思議だった。

「寮はひとり？　ペア？」

お茶のあと、光明が美樹江を畳へそと押さえつけると、美樹江は、光明に逆らいはしなかったが、まだそんなことをいつていた。光明の生活のアウトラインを知ろうとするのではなく、物を言っている間は光明が先へ進めないと思っっているらしい。それでいて美樹江は、光明が美樹江を黙らせる意図でズボンごと美樹江の体へ乗り掛かって行つたあとは、目をつむって、ぐったりして、もうこれまでだと覚悟を決めた表情をした。

美樹江の顔はどちらかというと泣き顔だが、光明に頬をさわられたり髪へ指を入れられて無抵抗でいるところはやっぱり美しかった。

それに美樹江は、そういうまでも受け身ではないなかった。光明が舌を入れるとその舌を吸った。洗練されたキスの仕方だった。

美樹江の学生時代やこれまで生きてきた世界が、具体的なことは何も分からないなり

に、漠然と光明の心に映ってくる。

ずっと以前、それは光明が就職して問のないころのことだが、光明は、金型設計部にいた先輩に連れられて、三鷹のキリスト教系の大学へ行ったことがあった。先輩がその大学にいる友達に会いに行った。

「いっしょに行ってみる？」

「ええ」

そういつたことで出かけたのだが、そのとき光明を驚かせたのは、学生、ことに女子学生のようすだった。

その大学はキャンパス内にゴルフ場や学生住宅のある学校で、光明からすると、何もかも珍しかったが、女子学生がいかに自由そうにしていることが、とくに光明の目についた。

学生ホールだという広い場所では、女子学生がベンチに腰掛けて膝を組んでいた。

光明は美樹江に手を出すと、荷が勝つてあとで苦しまなければならないかも知れなかった。

美樹江にはまだ学生の雰囲気が残っていた。光明はNCが職人の腕に取って替わる直前にいまの会社へ入った関係で、少しは鑢やすりが使えるし、会社の人事本部や生産本部の方針が